

Go To クリスマス

[聖書] マタイによる福音書 2章 1～12節

イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。王は民の祭司長たちや律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれることになっているのかと問いただした。彼らは言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者がこう書いています。

『ユダの地、ベツレヘムよ、
お前はユダの指導者たちの中で
決していちばん小さいものではない。お前から指導者が現れ、
わたしの民イスラエルの牧者となるからである。』

そこで、ヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を確かめた。そして、「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせしてくれ。わたしも行って拝もう」と言ってベツレヘムへ送り出した。彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。学者たちはその星を見て喜びにあふれた。家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。ところが、「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を通って自分たちの国へ帰って行った。

[1] 不安の中のクリスマス

この朝、ご一緒にクリスマス礼拝を持たせて頂けることを感謝します！ 一年が早いですね。何か慌ただしくて気持ちがクリスマスに追いつかないという感じの方もおられると思います。実は私自身もそうなのです。けれど、「御言葉」が与えられていることが感謝です。聖書の御言葉を通して、“クリスマスの気分”ではなく、クリスマスという出来事を「体験」して行きたいと思います。

今日開かれている聖書の箇所は皆さんよくご存じの箇所なのではないかと思えます。ここにはそれこそクリスマスを「体験」した人たちのことが書かれています。「占星術の学者たち」とある、彼らですね。でもどちらかという、古来か

ら「**東方の博士たち**」とか、「**王様(スリーキングス)**」、或いは「**賢者**」とか呼ばれて馴染まれてきた人々です。これが実際にどこの国の誰なのかは、聖書は書いていません。まるでお伽噺やメルヘンのように思われても不思議はないかもしれません。しかし彼らはユダヤ以外の外国から旅をしてきた**異邦人**でありました。

今、お伽噺の様だと言いましたが、今日の箇所の中でとても**現実的な、リアル**だなあと思う言葉があると思いました。それは「**不安**」です。この学者たちがまずエルサレムにやってきました。2節にこうあります。「**(エルサレムに来て)**言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」これを聞いて、ヘロデ王は**不安**を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。」—このユダヤの国の中に漂っている空気や感情は「**不安**」なのですね。クリスマスの出来事が起こっている最中であるのに、です。—私たちもこの年のクリスマスは、手離しの喜びの中でと言うよりは、「**不安**」を抱えながら過ごしている、と言えるのではないのでしょうか。…ヘロデの不安というのは自己保身からくる個人的な不安だと思いますが、エルサレムの人々の不安というのは何なののでしょうか？ 私は、それももしかしたらヘロデと同じ、**自分の「生」、生き方が崩されるかもしれないという、変化を恐れる、漠然とした不安**だったのではないだろうかと思います。私たちはどうだろうと問われます。今、**新型コロナ**が猛威を振っている。いや、本当に身近に来ているかもしれない。他にも**人には言えない不安**があるかもしれない。とてもクリスマスどころではないと思ってしまうことはないのでしょうか？ クリスマスという出来事、御子の降誕、そのおとずれの前に自分で「**壁**」や「**扉**」を作っていないだろうか。…そして、**そのような恐れや不安とは全く対局にある人として**、この「**東方の学者たち**」は描かれているのだと思います。

[2] 彼らの旅(「Go to」)の目的

ではそうするとこの東方の学者たち、或いは王様だったかもしれない人たちは、とても素朴な心の持ち主だったとも言えると思います。けれど、無知ということではないでしょう。彼らは「**学者**」でもあったのです。偉大な学者という人たちは、**真理というものに対して謙虚な人が多いです。人間の限界**というものをよく分かっています。そのような普段静かな人たちが結構大胆な行動を取ることがありますよね。この旅した学者たちもそうだったのではないかと思います。これまでの**自分たちの経験を超えたもの、その存在にまみえたい。自分のこれからの生き方が変わっても構わないと**、冒険に一歩踏み出さず思いで、遠く自分の国からはるばるエルサレムにやってきたのですね。安全な旅である保証はどこにもありません。一体どれだけの距離、どれだけの日数がかかるのか、家族にも心配

をかけたでしょう。そもそも、その幼子に会うことが出来るのかどうか、確たるものは何も持っていません。それでも彼は「Go To」をしました。自分の人生を賭けて、この、約束された幼子に会わなければと思った。

そして会って「お誕生日おめでとう」と言ったのではありませんね。「彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。」とあります（11 節）。彼らはこの幼子を、神の子として拝し、宝を献げるために、つまり「礼拝」をするためにやってきたのです。私たちも礼拝で宝を献げますね。具体的には献金ですけれども、それは「私のあなたへの愛=私自身」をお献げします、ということですよね。私たちは毎週、この博士（学者・王）たちがした行為に続いて礼拝し、献げものをしているのです。ここには、礼拝の原点があります。

この学者たち（王たち）と、ヘロデの取り巻きの律法学者たちの相違について、哲学者の S・キルケゴールがこのように言っています。「聖なる三人の王たちにとって、頼りにできるのは、うわさだけしかなかった。しかしそれが彼らを動かして、はるかなる旅に出る決心をさせたのだ。律法学者たちは、すべてを知っていた。でも彼らは動かなかった。単なるうわさのあとを追った三人の王たちと、すべてを知っていたにもかかわらず、座ったままでいた律法学者と、真理はどちらにより多くあるのだろうか。」— 私たちも不安な日常の中で、また忙殺されるような日常の中で、「Go To クリスマス」をすることが求められているのではないのでしょうか？

[3] イエスは私たちを待っている

この物語ですが、注意深く読んでみると、初めはある時東方で星を見て、ユダヤのエルサレムまでやってきたわけです。そこまでは「研究」の賜物ですよね。けれどもその先、具体的にどこに行けばこの幼子に会えるのかは、彼らは皆目分らなかったのです。だから 2 節でエルサレムの人に尋ねている訳です。つまり最終目的地の場所は隠されている。「研究」だけでは到達できない。ここから先が「信仰」です。今日の週報の裏側に『クリスマスの贈る 100 の言葉』という本から三つを抜粋させて頂いたのですが、その三つ目に、「小さなイエスの兄弟会」のルネ・ヴォワイヨームという人の言葉をご紹介します。このような言葉です。

「彼（イエス）は全く控えめで、遠慮深い姿でやって来られた。騒ぎ立てることなく、…明らかに、神は、その子イエスを押し付けようとはされなかった。

むしろ人々の方から彼のもとへきて、彼を探し、見出さなければならぬ。イエスは無限に控えめな方。彼は私たちを待っておられる。」

この「彼は私たちを待っておられる」ということ。これこそ、クリスマスの秘儀で

はないでしょうか。私は思い出したのですけれども、私は大学一年生の9月にバプテスマを受けたその時、求道者として日曜日の青年会のクラスに参加していました。ある時に、女子の青年会メンバーの一人が、「とにかくイエス様と出会うことを求めて下さい。イエス様は待っていて下さるから、あとは神様が導いて下さいます」というようなことを言ってくれました。よく覚えています。「求める思いを大事に」、「でもあとは神様がして下さい」というのですね。本当ですね。その後まもなく決心の思いが与えられました。今日のこの博士（学者・王）たちが**最後は星の導き（聖霊の導きと言って良い）によってイエス様との出会いが与えられた**ように、神様の誘いが確かにあったなあ、と思うのです。最後は自分の力じゃない。

神様は、私たちを「待っておられる」のですね。神様は、なぜ幼子イエスを私たちの世界に送られたのでしょうか？—ヨハネ福音書の3章16-17節でこう告げられています。—「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで永遠の命を得るためである。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである」

このお方は、全く無力な赤ん坊となって下さいました。私たちにこう言っているかのようです。「わたしは最も弱い存在として来た。あなたの力、あなたの高慢を捨てて私を受け入れてほしい。わたしは最も単純な「命そのもの」としてやって来た。あなたの罪と汚れを洗う命をわたしから受けてほしい」と。—**神様は、私たち人間のために、「Go To 飼い葉桶」、御子を遣わされたのです。それは、私たち一人一人の命を慈しむ、限りない愛です。十字架でご自分の命を差し出されるほどの愛です。**このお方が、このクリスマス、誕生しました。それは、東方の博士たちの冒険以上に、**神様ご自身の、破格の冒険**だったのではないのでしょうか。「一人も滅びないために」一匹を探し続ける**あの羊飼いの姿**、いつ帰るとも知れない放蕩息子の帰還を一日たりとも休まずに待ち続ける**あの父親の姿**が、この幼子となったのです。「**求めなさい。そうすれば与えられます。**」—このクリスマス、もう一度、この幼子のもとへと参りましょう。そして、私たち自身を宝として捧げたいと思います。そこにクリスマスの真の幸いがあります。

（祈り）神様、今日東方の博士たち・王たちと共に幼子イエスを礼拝出来る恵みを感謝致します。この世界、また私たちの人生は不安が覆っているように見えてしまいます。しかし、そうではありません。救い主がお生れになった！あなたには神がいる！あなたの罪も赦されている！だから不安を捨てて、恐れるなど言って下さいませ。どうぞ、この救い主に私たちの真心をお捧げし、あなたを讚美する新しい命に生かして下さい。イエス様のお名前によって。アーメン！